

IV キャンプ利用者の意識

杉浦高志¹⁾・藤沢直樹²⁾・糸長浩司²⁾

Consciousness of Camping Users

Takashi Sugiura, Naoki Fujisawa & Koji Itonaga

要約

本稿は、丹沢大山でのエコツーリズムの課題を明確にする一環として、キャンプ利用者の利用実態及び利用意識を明らかにすることを目的とする。キャンプ利用者へのキャンプ場現場での直接アンケート調査を実施した。結果、休暇を利用した20～40代の家族や友人の団体客の利用が多く、都市近郊で便利な自然としての魅力を感じており、近隣の神奈川・東京在住者が大半を占める。キャンプ場周辺での施設利用や食材調達は少なく、地域への経済効果が薄い状況にあり、また、キャンプ行為による自然環境負荷等のオーバーユース問題意識はまだ十分に成熟しておらず、エコツーリズム普及活動が重要となっている。

1. はじめに

丹沢大山地域は、神奈川県の水源地域であり多くの河川が流れており、沢登りやキャンプなどの水辺でのレクリエーションが盛んな地域でもある。自然公園エリアでの幅広いエコツーリズムの普及、子ども達の森林・河川を活用した環境教育学習の展開が必要となっている。本稿では、丹沢・大山地域でのキャンプにかかわる利用者の実態及び意識をアンケート調査から明らかにする。

2004年8月16日・17日にキャンプ場現場で実施し、質問項目は「キャンプ場の利用頻度」、「キャンプ（自然とのふれあいを含めた）魅力・課題」、「自然や環境とのかわり（意識）」で、調査地は表1に示す8箇所を実施した。

2. アンケート回答者の属性

8つのキャンプ場で313票を収集した(表1)。地理的区分では、北丹沢15.7%(49票)、東丹沢12.1%(39票)、西丹沢12.8%(40票)、南丹沢59.4%(189票)であり、本稿での丹沢大山地域の東西南北別での分析に際しては、南丹沢での票数が多いことを考慮しておく必要がある。

回答者の年齢層は、30歳代が全体の37.4%(117人)

と最も多く、20歳代23.3%(72人)、40歳代16.6%(52人)、10歳代8.9%(28人)と次ぐ。50歳代(17人)及び60歳以上(7人)と回答者が少ない。キャンプ場の利用は比較的若い世代での利用が多いといえる。男女比は、男性が48.2%(151人)、女性が47.0%(147人)でありほぼ同比率である。

回答者の居住地は、神奈川県が83%(247人)と最も多く、次いで東京都が13%(38人)である。その他の居住地として、千葉県5人、茨城県4人等である。回答者の職業は、会社員が35.4%(102人)と最も多く、主婦28.5%(82人)、学生16.0%(46人)と次ぐ。また、最も回答者が多い(117人)30歳代は、主婦44.4%(52人)、会社員35.9%(42人)である。今回(調査を実施した日時)でのグループでの利用人数は10人未満が72.2%(226人)と最も多い。グループ構成は家族づれ142人(45.4%)や友人132人(42.4%)が多い。

以上より、神奈川県在住の30歳代をはじめとする若い家族や友人のグループでの利用が多いのが、キャンプ場の利用者像であるといえる。

3. 丹沢大山でのキャンプの魅力とキャンプ行動

丹沢大山地域へキャンプに訪れる主な魅力は、自然の涼感が217人(69.3%)と最も多く、次いで、丹沢の山並み105人(33.5%)、沢・滝・溪流162人(51.8%)であり、丹沢の(感覚的あるいは遠景での)自然環境への魅力が高い傾向にある。その一方で、湧水や魚釣り、鹿・動物など、具体的な魅力は低い傾向にある。また、車で入りやすい120人(38.3%)、都市・市街地に近い84人(26.8%)、場内施設の充実56人(17.9%)などの都市近郊で便利な(都市生活に近い)自然としての魅力があげられる傾向がある(図1)。

キャンプでの楽しみは、「水辺での水遊び」228人(72.8%)が最も多く、「野外での食事」224人(71.6%)、「自然の涼感を楽しむ」204人(65.2%)と次ぐ(図2)。

丹沢大山地域への訪れるキャンプ以外での目的は(図3)、ドライブが99人(31.6%)と最も多い。次いで、自然観察57人(18.2%)、登山48人(15.3%)、ハイキング43人(13.7%)である。

自宅を出発して、キャンプ場に来るまでの施設訪問、あるいはキャンプ後での他の施設への訪問状況を尋ねた。来

表1. 調査対象地

地域	キャンプサイト	票数(内訳)	総評数
東	宮ヶ瀬:清川村立 金沢キャンプ場		38票
西	西丹沢:丹沢湖キャンプサイト、大滝キャンプ場、河川敷	17票+15票+8票	40票
南	秦野:滝沢園キャンプ場、戸川公園 寄:丹沢清流荘	39票+96票	135票 51票
北	青根:緑の休暇村 青根キャンプ場		49票
計			313票

1) 日本大学大学院生物資源科学研究科生物環境科学専攻

2) 日本大学生物資源科学部生物環境工学科

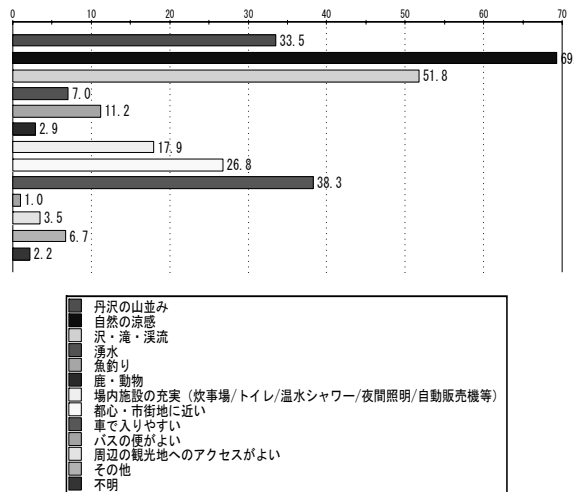


図1. 丹沢大山地域にキャンプで訪れる魅力

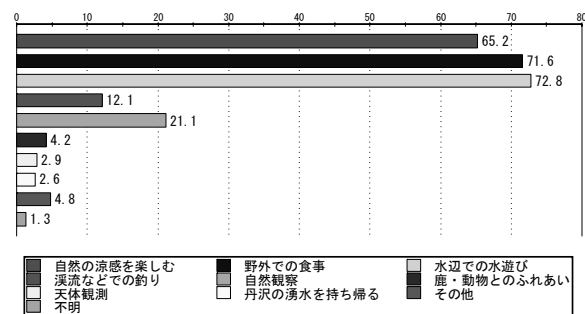


図2. 丹沢大山地域でのキャンプの楽しみ

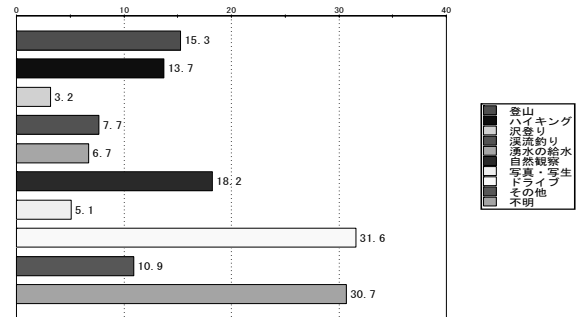


図3. キャンプ以外の目的で訪れる魅力

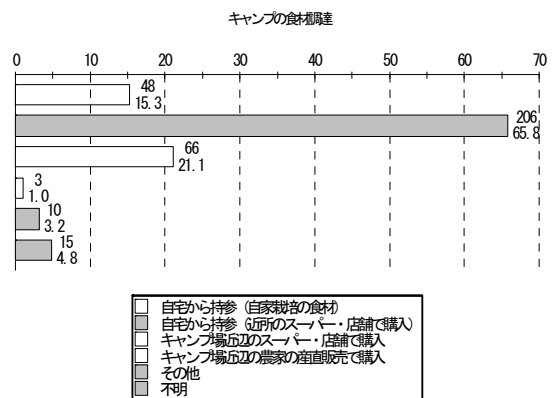


図4. キャンプの食材調達について

るまでによった場所として、「コンビニエンスストア」や「スーパー・量販店」の回答から、キャンプの食材や用品を購入してくることが伺える。また、「ビジターセンター（戸川公園を含む）」との回答が25人と多いが、このうち20人は南丹沢のキャンプサイトで、近接する秦野ビジターセンターとの回答である。キャンプ後に自宅以外の施設に立ち寄るとい回答数は123であり、「温泉」に立ち寄るとい回答も多くあった。

キャンプ時の食材調達は、「自宅から持参（近所のスーパー・店舗で購入）」206人（65.8%）と最も多く、「キャンプ場近辺のスーパー・店舗で購入」66人（21.1%）、「自家から持参（自家栽培の食材）」が48人（15.3%）である。「キャンプ場近辺の農家からの購入」は、最も少なく3人（1.0%）である（図4）。キャンプに伴う地域経済効果はほとんどなく、地域経済とキャンプ利用者とのつながりに対する何らかの改善、工夫が必要となっている。食材等購入費は、1万円未満が35.1%（110人）と最も多く、1～2万円未満が25.2%（79人）、2～3万円未満13.4%（42人）と次ぐ。不明が、16.6%（52人）である。

4. 丹沢大山地域での自然環境問題と参加意識

丹沢大山地域への人の訪れによる自然環境への影響についての問での各項目での回答は以下である。

「キャンプ場外の山林等を散策することでの生き物や動物への影響」では、「少しある」41.5%（130人）と最も多く、次いで、「ある」30.0%（94人）であり、一定の環境意識

は形成されている。「ゴミのポイ捨てによる環境破壊」では、「非常にある」47.9%（150人）と最も多く、次いで、「ある」30.4%（95人）である。「野外でのトイレやシャワー、炊事による水質や下流部への影響」では、「ある」42.5%（133人）と最も多く、次いで、「少しある」27.2%（85人）である。「動物にエサを与えることでの影響」では、「ある」36.7%（115人）と最も多く、次いで、「少しある」27.8%（87人）と次ぐ。「個々での自動車で乗り入れることによる影響」では、「ある」37.7%（118人）が最も多く、次いで、「少しある」33.9%（106人）である。

以上の結果を「ある」と「非常にある」での合計で見ると、「ゴミのポイ捨てによる環境破壊」が78.3%で最も多く、「野外でのトイレやシャワー、炊事による水質や下流部への影響」62.9%、「動物にエサを与えることでの動物への影響」58.4%、「個々での自動車で乗り入れることによる影響」50.2%と次ぐ。「キャンプ場外の山林等を散策することでの生き物や動物への影響」40.2%で、動物への影響に関しての危機感さはさほど強くないことに伺える（図5）。

丹沢大山の自然環境の維持・再生、丹沢大山地域の暮らしや経済の向上に関して、自分自身でかかわれそうな事柄についての質問では、「ゴミの持ち帰りを徹底する」271人（86.6%）と最も多い。「周辺の植生を踏み荒らさない」175人（55.9%）、「炊事やシャワー時にはエコ石鹸（洗剤）を使う」123人（39.3%）が次ぎ、キャンプ場での直接的な行為にかかわることでの環境配慮意識が伺われる。ただ「トイレで用をたした紙を持ち帰る」は18人（5.8%）と最

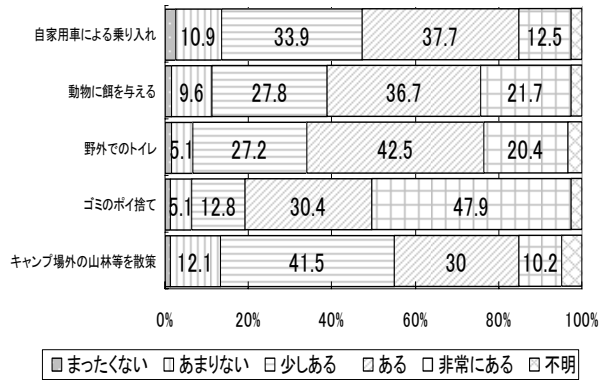


図 5. キャンプ等の行為による自然への影響意識

も少なく、この行為への抵抗、都市公園的に利便性への期待があるものと伺われる（図 6）。また、エコ洗剤の使用に関しては 4 割弱であり、キャンプでの主要な環境汚染源である河川水質汚染に対する当事者としての配慮意識は高い状況にはなく、今後のキャンパーに対するより具体的な環境教育や環境利用基準の設定等が必要といえる。

丹沢大山の自然環境の維持・再生に金銭面での支援として、一回のキャンプにつき、キャンプ場利用料金以外での支払う金額についての質問では、一回のキャンプにつき一人 100 円が 34.8%（109 人）と最も多く、次いで、一人 200 円が 22.4%（70 人）、一人 200 円以上 18.2%（57 人）である。このことから、一回のキャンプにつき一人 100 円～200 円程度での環境再生のための支援的援助意識があり、この金額での徴収の可能性が伺える（図 6）。

5. まとめ

本調査での夏期でのキャンプ場の利用者は、夏期休暇を利用した神奈川県在住の 20～40 代の家族や友人の団体客が多く、都市近郊で便利な自然としての魅力を感じている。キャンプ利用者のキャンプ場周辺での施設利用や食材調達には少なく、キャンプに伴う派生的な丹沢大山地域への経済効果は薄い状況であり、今後の改善が必要である。

自然環境の維持・再生意識では、「ゴミの持ち帰り」は 86.6% で高いが、キャンプ行為に伴う河川水質汚濁配慮としての「エコ洗剤活用」は 39.3% と過半数以下で、その自然影響性から考えると低い意識にある。更に「トイレの紙を持ち帰る」は 6% と低く、この問題への抵抗感強い。「周囲の植生を踏み荒らさない」も 55.9% と半数程度であり、周囲への自然配慮意識は高くない。今後、キャンパーへの更に詳細な丹沢大山の自然環境問題と再生の重要性、河川水質問題等の情報発信、エコキャンプに対する普及啓発、丹沢大山版のエコキャンプガイドラインの設定、環境教育・学習を組み込んだ、キャンパーを対象とした丹沢大山版エコツーリズムの展開が必要と考える。

謝辞

この調査研究にあたり御助力をいただいた、丹沢大山ボランティアネットワーク、キャンプを楽しみに来られたキャンプ場来訪者のアンケート御協力者のみなさまに謝意を表します。

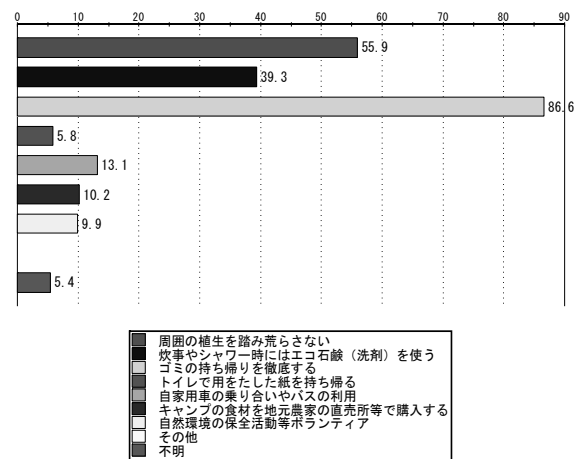


図 6. 丹沢大山の自然維持・再生にかかわれそうな事柄

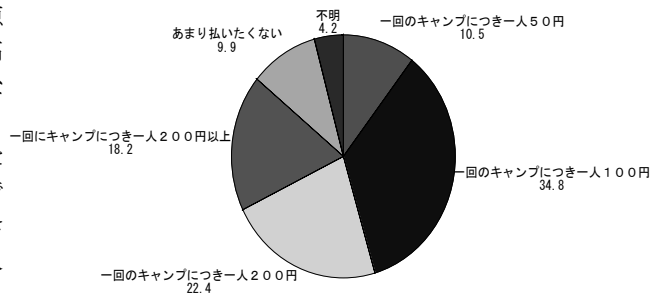


図 7. 金銭面での支援可能金額

文献

- 丹沢大山ボランティアネットワーク・神奈川県自然環境保全センター編, 2003. 平成 14 年度 丹沢大山ボランティアネットワーク活動報告書. 神奈川県自然環境保全センター.
- 丹沢大山ボランティアネットワーク・神奈川県自然環境保全センター編, 2004. 平成 15 年度 丹沢大山ボランティアネットワーク活動報告書. 128pp. 神奈川県自然環境保全センター.
- 丹沢大山ボランティアネットワーク・神奈川県自然環境保全センター編, 2005. 平成 16 年度 丹沢大山ボランティアネットワーク活動報告書. 144pp. 神奈川県自然環境保全センター.
- 杉浦高志・糸長浩司・藤沢直樹, 2005. 丹沢大山地域における登山・キャンプ利用者の環境意識に関する研究－「丹沢大山総合調査」における地域再生研究プロジェクトその 1－, 2005 年度日本建築学会大会(近畿) 学術講演梗概集, E-2, pp.499-500.

※本稿は、浜口勝哉「丹沢大山地域における登山・キャンプの利用実態とオーバーユース意識に関する研究」(2004 年度日本大学生物資源科学部卒業論文)の第三章「キャンプ場利用実態・意識にかかわる調査」をもとに、加筆・修正したものである。